# 母親

若杉鳥子

青空文庫

みを子が会社を嵌になってから、時々、母親の全く知らない青年が訪ねて来た。

朝早くやってくることもあれば、昏れてからくることもあった。青年は一度でも、「こんちは」とか、「御めん下さい」とかいったためしがない。人の出てくるまで、のっそりと土間の隅に立っていた。

「みをさんいますか?」

ただそれだけいった。額の高い、眼の黒い、やや猫背の男——しかし一度、会った人は忘れないであろう印象の強い男だ。

みを子は、その青年と二三分立ち話をして引ッ込んでくることもあれば、一緒に出て行って長いこと帰らないこともあった。

「あの人、何処の人だえ?」

母親が何気ない風をしてきくと、

「もと、会社にいたひと。」

みを子も何気ない風にこたえた。

だが、会社員という風でもない——と母親は思った。学生のようでもあり、労働者のようでもある。その実、いつもキチンと背広にネクタイを結んでいる。

母親は何故かその青年を虫が好かなかった。その男がやってくる度に、娘を少しずつ自分の

手からむしりとってでも行くような気がした。

「ああいう人とは、あんまり近しくしない方が、よかあないか。」

母親がそんなことでもいうと、みを子は険しい眼つきをして母親を見た。

母親は、みを子が会社を馘にされたのを、何か非常に不名誉なことででもあるように思って、そのことは、みを子の兄にも秘していた。すると、ある日の新聞は、『全協の魔の手伸びる』とか、『赤い女事務員』とか、そういう標題の下に、彼女達の組織しようとしていた、使用人組合の分会準備会がばれたことを、デカデカと書いていた。それですっかり、みを子の馘になった理由が、兄にも知れてしまった。

長い間木版工をして、現在は印刷局に勤めているみを子の兄は、その晩殊に機嫌が悪かった。——肺を患っていて、自分の馘も危ぶないのに、この上妹のことでも影響して失業でもしたら、これからどうして食べて行く！

妹がひどく身勝手なことでもやったように腹が立って仕方がなかった。

夕方、親子三人は気まずく食卓を囲んで向かいあっていたが、その時そっと格子が開いた。

「また、誰か来たようだぜ。」

兄は耳さとくいって箸を置いた。

「そうかい——」

母親はみを子にそっと眼くばせをした。

みを子は前掛けを口にあてて、そそくさと立って行った。母親が聴き耳を立てていると、みを子は下駄を突っかけて外へ出たようだった。そして十分程経ってから戻って来た。母親にはその十分がひどく長く感じられた。

「あの山崎とかって人かえ？」

母親はその青年が始めて訪ねて来た時名を覚えていた。

「ん……」

みを子は下を向いて頷いた。すると、今度は兄がきいた。

「その山崎って奴、何だい？」

みを子が黙っていると、露骨に憎悪を漲らして、

「そいつがその……お前たちの指導者だっていうんかね。」

わざと冷笑的にいった。

みを子はムッとしたが黙っていた。

兄はある製作所の木版工の中から、優秀な技術者として抜擢され、現在では印刷局の鐫工に雇われている。従って、この名人気質をぶらさげている彼と、みを子はどうしてもうまく行かなかった。そればかりでなく、職工であって、同時に月給取りである彼は、青年労働者の生活がどうすればよくなる——なんて、初歩的なことすら少しも考えはしなかった。しかし、それ

でいながら彼は、ブル新聞に現れた左翼の運動の記事を熱心に読む、そして無暗に受け入れて兎や角いう。

「山崎って、どんな男か知らないがね、お前たちみたいな女事務員や、百貨店の売子なんていう街頭分子なんて組織して一体どうしようていうんだい……」

その晩もとうとうまた彼は始めた。

みを子は兄が山崎のことをいってる間は、黙ってる方がいい——と思っていた。しかし話が組合のことに触れてくると、もう黙ってはいられなくなったのだ。

「何故そんな訳の解らないことをいうの兄さん——私たちは、ちゃんと職場を持っているんですよ。」

みを子は兄の僭越と無理解とに腹が立った。

「兄さんこそ、兄さんこそ、大きい工場に働いていながら独りぼっちで、向こうのいうなり次第になってるじゃないの、長い長い見習期間を、少しばかりの月給貰って、くる日もくる日も唐草ばかり彫って……」

みを子が唐草というのは、紙幣の図案の一部分のことだった。

「——私たち生活をよくするには、ただ一つの道しかないんですよ、ダラ幹のいない、一番闘争的な組合に入って、団結して闘うより仕方がない……」

「誰に教わったんだッ生意気なッ。」

兄の手先は、怒りの為に細かく慄えていた。

「私たちの方には、全協一般使用人組合がある。兄さんの方にも出版労働って組合がある。組合は闘争的な加入者のある処だったら、百貨店だって何処だって、職場、職場へどしどし組織の手を伸ばします……」

みを子はポッと頬を染めて、何時までも喋りつづけようとした。暫く彼女の雄弁はつづいた。その間兄は、額とすれすれにおろした電燈の笠の下で、顳※(こめかみ)をぴくぴくさせて、泣き出しそうな表情をしていたが、

「みを子――」

矛盾に堪えられなくなるといつもいうように、彼はまたそれをいった。

「俺がお前のようなことをやって、誠にでもなって見ろ、この生活は誰が背負うんだ。」

母親は、はらはらして、いい争う兄妹を見ていた。

みを子が何時の間にそんな理窟をいう娘になったかと思って、まだ子供っぽい肩のあたりを見ていると、不思議と娘のいうことが解った。しかしまた病身で勤めている兄の方も、たまらなく、可哀想になった。

そのことのあった翌朝、母親が眼を覚ました時は、みを子の寝床は空ッぽだった。何時間経っても帰って来ない。

娘は行ってしまったのだ――そう気がついた瞬間、母親の眼を掠めたものは、山崎という青年の姿だ！　だがその男は何処に住んでいるのか、さっぱり見当もつかなかった。

そのうちに一ケ月余り経った。

土砂降りの日があると、翌日はまた夏のようにあつい日があった。方々で出水や崖くずれの噂が高かったが、みを子の消息などは少しも知れなかった。母親は一刻も娘のことが忘れられなくて、その日その日の天候と一緒に、荒れ狂うような気持ちだった。

するとある日、池田まさ――という知らない人から一通の手紙が来た。彼女は慄える手で封を切った。

前略、みを子氏こと山崎氏の関係にて検挙され、その後行方不明の処、昨日Y署に留置されていることが、やっと解りました。早速Y署へ、本人引き渡しを交渉されたく願います。家族の方が行かれるのが、一番都合よろしいと存じます。早々。

悦びと驚きと、彼女の頭は混乱した。直ぐ仕度をして出掛けた。市電を下りて駈け込むように警察の門を入って行ったが、係の者がいないといって拒絶された。それから彼女は、毎日のようにY署へ行った。特高に何百遍も頭を下げた。

そしてある日の夕方――母親はやっと娘を引き渡して貰った。

「みを子――」

蝋のように蒼ざめ、透き徹った娘の顔を見ると、彼女はただ胸が一ぱいになった。

もう袷を着る季節だのに、みを子はまだ、家を出る時に着ていた絣の単衣を着たままだった。母親は風呂敷の中から羽織を出して着せた。

みを子は母親の肩に掴まって、危ぶない足許を踏みしめて、警察の段々を降りた。外に出ても母親はハンカチを眼頭に宛てて泣いていた。

「ナニ泣いてんの、母さん――」

みを子は横眼で鋭く母親を見ていった。

「先刻からみっともないったらありゃしない。私は何も警察へなんか母さんに頭を下げて貰うような、悪いことをしたんじゃないんですよ。」

母親にとっては、それが二ケ月めでやっと逢うことのできた娘の、最初にかけてくれた言葉なのだった。

『娘も変わってしまった――』と彼女は思った。しかし、そういうみを子の気持ちもよく解らないのではなかった。

母親がみを子を連れて家へ帰ってゆくと、職場で喀血してから、仰臥したきりの兄は、久しぶりに妹を見て、壁のような頬にサッと血を上せた。しかし何もいわなかった。

そしてある日、彼は前と別人のような素直さでみを子に話しかけた。

「あの、何といったッけねあの人は、そうだ山崎といったね。あの人は今、どうしているんで

い？今度は一ぺんも訪ねて来ない。」
「あの人やられました」
「そうか――」
「多分もう、市ヶ谷へ廻った時分でしょう。」
「やっぱりああいう人が男だ！　俺なんかこうして患っているうちに戦だ。どう足掻いたって仕方がない。こうして死ぬのを待ってるようなもんだ。」
壁の方へ伸ばした長い足は、掛け蒲団の上からでも痛々しく骨ばって見えた。

帰って来て半月ばかり経ったある日、また、みを子は「ちょっとそこまで――」といって出たきり帰らなかった。夜になっても帰らない。
母親は前のこともあるので、泣かないばかりに胸をすぼめて考え込んでしまった。
何か書き遺してでも行きはしないか――彼女はみを子の持ちものの間を捜し廻った。
何もなかった。ただ一通、ノートの間に手紙が挟まっていた。黄色い封緘ハガキだった。
表には、市ヶ谷××町××番地池田方、青木みを様とあった。裏には、山崎二郎。
――やっぱりそうだ！　彼女は一しんにその手紙を読んだ。毛筆で細かく一ぱいに書いてある。達者過ぎて読みにくい字だった。飛び飛び読んで行った。
「今度、君は職場が変わるそうだが、止むを得ない事情のない限り、余り度々変わらない方が

いい。そうして成(なる)べく皆と仲よくつきあって、好い友人を沢山拵えてくれ、そのうち段々現在の環境を脱け出すようにすることだ。――兄さんにはあまり楯ついちゃいけない、彼は病人だから。その人がいくら動くのを好まなかった処で、すべての情勢は決して彼を動かさずにはいないのだ。それからもし、いってもいいのだったら、あのやさしいお母さんに俺からよろしくとつたえてくれ。」

彼女は涙を一ぱい溜めてそれを読んだ。

あの蝙蝠(こうもり)のような暗い男の何処に、こんな優しい愛情があったのだろう――

終わりの方には、何の本を差入れてくれとか、汚れたものを宅下げしたとか書いてあった。

それで山崎が何処にいるかということが、母親にも大てい解った。

みを子からはその後何の消息もなかった。

するとある日母親は、銭湯で近所のおかみさんから呼びかけられた。

「此のつい四五日前、私んとこの娘が、お宅のみをちゃんに逢ったっていってましたんですよ。」

「えッ何処で、みを子に――」

「それがさ、亀戸の先の方でなんですよ。」

「人違いじゃありませんかね……」

「いえ、うちのはみをちゃんと学校が六年間も一緒でしたものね。」

「で、娘は、どんな風をして居りました?」
「日本髪に結って、お弁当箱をもって、何でも女工さん達と一緒に歩いてましたって……」
「それで、あれは元気でしたろうか?」
「さ……うちのが、みをちゃん——と呼んだら、急いで行ってしまったっていってましたですよ。」
　折角きいた話は、あっけない話だった。しかしみを子が無事でいることだけは、彼女にとって、唯一つの大きい希望だった。

　息子はこの二三年、病気で欠勤がちだった。しかし家にいる時でも、技術がすたるといって仕事をしていた。
　紙幣の裏表を占めている、息づまる程交錯した、毛よりも細い線——それを見つめていると、母親は肌寒いものが背筋を走るのだった。複雑をきわめた線と線との間に、息子の命が日々に少しずつ磨滅してゆくのを、眼の前に見せられる気がした。
「お母さん——俺は永いこと苦労をかけたナ。」
　ある時、彼は床の上に半身を起こして、自分の手や足を眺めていった。
「俺が死んだら、お母さんはどうする?」
「どうするって、癒ってくれなくちゃ困るじゃないか。」

「どんなことしても、みを子を捜し出さなくちゃいけないよ。ほら、この前、みを子が警察にいたのを知らしてくれた人、あの人に会ってきいてみたら解る。あの人の手紙、ちゃんと、とってあるだろうね？」

「市ヶ谷富久町×××番地とある。名前は池田まさ――と書いてあるよ。」

そのあくる朝だった。母親が湯たんぽをとりかえるために、病人の足に触ったら、しんしんと冷めたくなっていた。揺り起こして見たが返事もしなかった。

息子はとうとう壁の方を向いて、知らないうちに絶息していた。

ふだんから偏屈な独りぼっちの男だったので、友人一人悼みに来なかった。また知らしてやる処もなかった。

俺が祖にでもなって見ろ。この生活は誰が背負うんだ――息子はよく口癖にそういって、自分や娘にあたった。だが、全くあれには青年らしい日が一日もなく死んでしまった――そのことを母親は一番辛く考えた。

しかし長い間の病人を見送って、彼女は今始めて、台所と子育てとの不生産的な生活から解き放たれたような気がした。

市ヶ谷富久町は、古い細かい家のごたごたした街だった。池田という家は人にきいても解らなかった。彼女は一時間もまごついた末、やっと曲がりくねった小路の突き当たりに、その家

を発見した。

「池田さんはこちらですか？」

格子を入って、内部の様子を見た。どうも普通の家らしくない——と思った。

本や、椅子や、卓子（テーブル）がごたごたと置き並べてある。医者にしては薬品のようなものもないようだし、雑誌社にしては汚らしいし、ハテ、それとも夜学の先生の処かしら——と思いながら、不安な気持ちで彼女は立っていた。

そこへ色の浅黒い眼鏡をかけた女が顔を出して、いった。

「どなたの、御家族の方ですか？」

「池田まささんという人に会いたいんですが——私は、青木の、青木みをの母です。」

「池田さん——」

眼鏡の女は奥の方へ声をかけてから、

「池田さんはいま洗濯してますから、上って待っていて下さい。」

台所で水を使う音がしていた。

彼女は、骨のはみ出した椅子に腰かけて周囲を見廻した。

三畳と八畳と二間ぶちぬいた真ン中に、大きな卓子が二つ頑ばっていて、眼鏡をかけた先刻の女が、傍目もふらずペンを動かしてる。

彼女の腰かけている正面には、古本屋の倉庫のように、ズラリと本が並んでいる。横文字の

も、おそろしくむずかしそうなのも、また文学書のようなのもあった。

しかし、まだもっと彼女を不思議がらせるものがあった。室の一隅の壁には、下から五六段ばかりの高い棚があって、質屋のように沢山の着物と帽子が載せてある。

此処は一体何をする処なんだろう——と彼女は頻りと考えていた。

「私、池田です。」

そこへまさ子が朝鮮服のようなものを着て出て来た。眼のくりッとした娘だった。

彼女はまさ子にくどくどと挨拶してから、

「あの、みを子は、亀戸の方にいるってことでございますが、それ本当でござんすかしら……」

「みをさんですか？　とても勇敢にやっているんですよ。」

まさ子は子供っぽい大きい眼を輝して、

「ええ、南葛にこの間まで——でも今度他の地区に変わったんですよ。」

「そして、あれから始終あなたの処へ、何かたよりがありますでしょうか？」

「ええ、ここの仕事が忙しいんで滅多には会えないんですけれど、そりゃ始終ことづけはあるんです。」

「——此処の仕事というと？」

まさ子は眼をぐりッと動かした。

「救援会の事務です！」
「それでは、あの、此処が――」
彼女は娘から救援会の話をきいていた。
――無産者解放運動の犠牲者や、その家族の救援運動をするために、白テロと戦いながら公然と看板を出して、あくまで犠牲者の便宜に備えている処だ。それは丁度、暗い海の燈台のような役目をするんだ……と。
そうと知って、彼女はまた新しく室内を見廻した。
「あの本は、みんな牢から戻って来た本なんですね？」
「ええ一通りもう、市ヶ谷も豊多摩も廻って来ました。」
「これは何です？　これはッ？」
彼女は珍らしそうに、卓子の上のカードを指してきいた。
「これですか？　これは犠牲者の姓名と、差入れ、その他のことを記入するカードです。」
――この中には、山崎二郎の分もきっとあるに違いない！　と思った。
彼女は息子に死なれてから、妙に山崎のことを考えた。
「あれは何です？　あれは？」
彼女は先刻から大きい疑問としていた隅ッこの棚の前へ立って行った。
棚は五段になっていた。一人分ずつ帽子と着物とが括ってあった。

中折れと洋服、鳥打ちと紺絣、青服と鳥打、詰襟、立縞、スプリングコートまである。

学生、労働者、小商人、そこには皆の脱ぎ棄てた、男の雑多な服装があった。

彼女は皹(ひび)だらけな大きい手で、一つ一つ撫で廻して見た。——捕る時まで体を包んでいたその着物には、まだ皆の熱い血が、ほとぼりを残しているようにさえ思えるのだ。

春、夏、秋、冬、白い夏服、綿入、外套、帽子がその検挙の季節をさえ、まざまざと語っていた。

「これ、みんな、引き取り人のない人のですか?」

彼女は鼻をつまらせてきいた。

「ええそうです。親も兄弟もない独り者で、入ってからただ一度の差入れもない人も沢山あるのです。それからまた立派な家があっても、この運動に入るためには、肉親と縁を切った人も沢山あるんです。」

——それはみんな、息子であり娘であり、一筋の血だ! 彼女は感動に堪えられなくなって、荒れた骨ぶとな手で顔を掩うた。

それから間もなく彼女は家をたたんだ。そして娘の友達のまさ子と一緒に事務所の傍の長屋に移った。知らない人はまさ子の本当の母かと思う位、まさ子について何処へでも出かけた。まさ子の代わりに警察へも行った。

「てめえ、救援会だろう――」
「いえ、私は××の母です。」
「一緒にブチ込んでやるぞォ」
何と脅かされても、根気よく彼女は差入れに行った。毎日出かけた。そしていつでも、目的を達して来た。
「まあ、おばさんには奴らだってとても敵わないわ。」
まさ子は感服すると、彼女は経験を誇るように、
「やっぱり、倒れるまでやらにゃあ――」
反身になって、晴れ晴れという。
そして各地区に洗濯デーがあると、誰よりも先に出掛けて行くのは彼女だった。

# 青空文庫情報

底本：「渡良瀬の風」武蔵野書房
　1998（平成10）年11月9日初版発行
底本の親本：「月刊批判11月号」我等社
　1931（昭和6）年11月1日発行
　「年刊日本プロレタリア創作集1932年版（改定版）」日本プロレタリア作家同盟出版部
　1932（昭和7）年3月25日初版発行
入力：林幸雄
校正：大野裕
2001年1月11日公開
2001年1月12日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 母親

若杉鳥子

2026年10月1日　第二版

## 奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/